

韓 昇憲 (ハン スンヒ)

韓国出身 / 2019～2020 年度奨学生

東京外国語大学 総合国際学研究所世界言語社会専攻 博士課程

最近、韓国では「進歩的」政治家の象徴と言われるソウル市長「朴元淳」市長の自死が話題となっている。朴市長は、韓国民主化運動に積極的に関わり、民主化以後にも今日の韓国型の「草の根」の市民運動の原型を整えたと言っても過言ではないほど、市民運動家としてよく知られている人である。1990年代には日本軍「慰安婦」問題を解決するために第一線で活躍した経歴も持っている。そのような人が秘書に長い間性暴力を行使したと疑われ、ついに自死に追い込まれたということは、私自身にとっても大変驚きであった。

韓国ではこのような朴市長の取り返しのつかない過ちについての評価をめぐって意見が分かれている。今までの朴市長の業績を勘案して今回のことに関して朴市長の立場を積極的に擁護する人はいないにしても、社会的な発言をせず沈黙を守る進歩的知識人は予想以上に多い。朴市長の死で公式的な捜査は終結したが、一方では若いフェミニストを中心に朴市長の死とは関係なく、真相究明をはっきりすることで、被害者の傷ついた心を癒すことに市民社会が力を合わせるべきだという声が上がっている。

私自身も、朴市長の市民運動家としての経歴、卓越した行政専門家としての朴市長の能力は高く評価し、尊敬している。だが、いくら社会的に評価されるべき業績を達成したとしても、他人の人生を踏みにじる行為をしたとしたら、それはその罪に相応する罰を受けるべきであると考えている。性の問題は、その人の政治的な性向に左右されることなく、冷静に判断すべ

き領域の問題である。まだ韓国では、朴市長を庇う意見が多いように感じられるが、今回の事件を契機として韓国社会のジェンダーに対する感受性が高まることを期待している。